



崇敬会大祭における添釜

初詣では氏神さまから

崇敬会会員と家族の昇殿参拝

平成二五年一月三日午前一〇時三〇分（第1回）

午前一一時三〇分（第2回）

一月三日の午前一〇時三〇分からと一一時三〇分からの2回、崇敬会会員とその家族にかぎり、昇殿参拝の式をおこない、神社から神酒と特別な祈祷「一陽来復御守」の神札が授与されます。なお、一月の「誕生祭」の方は第1回目にご参拝ください。

崇敬会では新春記帳所を設けますので、ご記帳のうえ、御供物をお受け取りください。なお、境内には、甘酒進上の席も用意いたします。

ご家族そろって多数ご参拝ください。

ご神幸祭執り行われる

六月一〇日(日)に、ご鎮座九五〇年大祭以来のご神幸祭が行われました。先例に基づいた列次を組んだ行列と壺之神輿が氏子の十四町会を巡りました。好天に恵まれ、沿道には多くの人々が集まり、賑わいました。また、神獅子舞(大田区指定無形民俗文化財)は、国道の東側の七町会を道行きし、各神酒所で演舞しました。



壺之神輿の宮入り



神酒所で演舞する神獅子舞



列次を組んだ行列

崇敬会大祭

十一月三日(土・文化の日)、会員をはじめ多くの方々に参加していただき、二十四年目を迎える崇敬会の大祭が催されました。

昇殿参拝を行った後、厳かに献木式が行われ、崇敬会奉獻として「きばな藤」が植樹されました。境内では乙亥会(おといかい)の鈴木宗景先生はじめ皆様の奉仕により添釜も行われました。



「きばな藤」の植樹の様子

伊勢神宮の式年遷宮

伊勢神宮(正式名称は「神宮」)には、皇室の祖先神であり、太陽を神格化した天照大神を祀る

皇大神宮(こうたいじんぐう)(内宮・ないくう)と、衣食住

の守り神である豊受大神を祀る

豊受(とようけ)大神宮(外宮・げくう)の二つの正宮がありま

す。「神宮」はこの正宮および別宮と摂社・末社などの総称

です。神宮の起源は、『日本書紀』

では次のように伝えられています。

崇神天皇の時代、天照大神を天皇の居所で祀っていました

が、その神威を恐れ、皇居から出して、倭(やまと)の笠縫(かさぬい)

(か)邑(むら)で祀ることにしました。

次の垂仁天皇の時代、皇女の倭姫命(やまとひめのみこと)が鎮座地を求めて旅をし、伊勢

の地に祀ることになったのです。外宮は雄略天皇の時代、丹後国から伊勢へ遷座したと別の記録で伝えられています。

神宮の正殿(しょうでん)は唯一神明造(しんめいづくり)と呼ばれる独自の形式です。正

面の柱間は三間、奥行は二間で、正面の扉以外は板壁となってい

ます。屋根は切妻造り、茅葺(ちがや)で、千木(ちぎ)と鯉魚木(かつおぎ)

がつかます。柱は掘立柱(ほったてばしら)で、両側面に本体

とは別の棟持柱(むなもちばしら)があります。礎石(いし)を用いた

建築を基本とする寺院の建物と比べると、非常に古い形態を保っています。

式年遷宮は定期的に行われる遷宮です。神宮では、原則として二〇年ごとに、二つの正宮の

正殿、別宮の全ての社殿を造り替えて神座を遷します。また鳥

居、御垣、御饌殿などの殿舎、装束・神宝、宇治橋なども造り替えられます。式年遷宮は、天

武天皇が定め、持統天皇四年(六九〇)に第一回が行われました。その後、戦国時代の一二〇年以

上に及ぶ中断や幾度かの延期などはあったものの、平成五年の

第六一回遷宮までおよそ一三〇〇年にわたって実施されてきて

います。遷宮では、隣接する遷宮地に

従前の殿舎と寸分違わない殿舎が築かれます。耐用年数が短い

白木の掘立柱建物の古い形式を忠実に保持すると共に、常に新

たに清浄であることを求めているのです。二〇年の期間は、「清

浄さ」の限度期間、技術伝承に適合的な時間とみられています。

また遷宮には一万本以上のヒノキ材が用いられ、材を伐り

出す山は御杣山(みそまやま)

と呼ばれます。遷宮では、山口祭・木本祭(このもとさい)をはじめ、木造始

祭、御木曳行事、鎮地祭、立柱祭、御形祭、上棟祭など多くの祭りと行事が行われます。平成

一七年からは第六二回式年遷宮の各行事が行われており、来年

の一〇月に遷宮行事の中核となる神事である遷御(せんぎょ)―

神体の渡御(わたり)が行われます。一方、大国主大神をまつる出

雲大社では、延享元年(一七四四)に造営された本殿(国宝)

をはじめ、諸建造物の六〇年ぶりの遷宮・修造が平成二〇年か

ら行われています。本殿の遷座祭は来年五月に予定されています。

平成二五年は、日本を象徴する神社である伊勢神宮と出雲大

社の遷宮が行われる大切な年なのです。

(平野卓治記)

八幡塚村と畠山重忠

江戸幕府が編纂した武蔵国の地誌である『新編武蔵風土記稿』には、八幡塚村に関して、次のような興味深い記載がみえます(『六郷神社誌』四八頁)。

「当所の開けしはいと古きことなるへし、林春齋六郷橋吟自註に、土人の話をのせて此地は畠山重忠居住の所なり、重忠は当国の甲族にして、鎌倉へも屢往来せしなれば、別館など設しむしろべからすといへり、此等のことも年代もふりたれば今より考ふへからず、又【東鑑】等には、所見なきことなり」

すなわち、八幡塚村には武蔵武士である畠山重忠が居住し、鎌倉への往来のために居館を設けていたが分からないとの地元の話があるが、今でははっきりせず、鎌倉幕府の歴史書である「東鑑」(「吾

妻鏡」)には見えないとしています。

畠山重忠は、平安時代末から鎌倉時代はじめの武蔵武士の代表格とみられています。本拠は畠山館(埼玉県深谷市)と菅谷館(比企郡嵐山町)を核にした武蔵国北部です。源平合戦では様々なエピソードが伝えられ、一の谷の合戦で源義経が「逆落とし」を執行した際、重忠は愛馬を労わり、背負って断崖を下りたという話は著名です。鎌倉幕府では、源頼朝の右腕として活躍しましたが、囚人扱いを受けたり、謀反の嫌疑をかけられることもありました。しかし、常に誠実で、清廉潔白な態度を貫きました。最期は二俣川で幕府の大軍と戦って討たれ、非業の死をとげています。また重忠は武芸だけでなく、今様や音楽をはじめ幅広い教養を身に付けており、まさに武蔵

武士の鑑と評されています。

江戸時代には、源平合戦を題材とした浄瑠璃や歌舞伎に重忠はしばしば登場します。理想的な武士像と共に、非業の死を遂げたことが、重忠を伝説化し、超人的な人物として描いていくこととなります。こうした芝居などを通して庶民にも武士の鑑としての重忠像が広まっていったのです。

畠山重忠が八幡塚に居住したとの話は、『新編武蔵風土記稿』も疑うように、歴史事実ではないでしょう。しかし六郷の地域は、東海道が通り、多摩川の渡河点を抱える交通の要衝であり、多くの人々や物資が行き交ったことは間違いありません。理想的な武士という重忠像が広まっていく中、六郷・八幡塚村の交通の要衝という地域的特質と相まって重忠と結びつける伝承が作られていったのでしよう。

(平野卓治記)

◆お知らせ

恒例の神社参拝バス旅行は、来春二月一六日(土)に実施いたします。今回は静岡県内の浅間神社等を巡ります。詳しくは別紙をご覧ください。多くの方々の参加をお待ちしております。

◆平成二四年度会費納入のお願い

年会費(平成二四年四月一日より二五年三月三十一日まで)未納の方は、お手数でも同封の振替用紙でお納めください。社務所でも受け付けております。なお、すでにお納めの方は失礼をご容赦ください。

発行 六郷神社崇敬会

〒一四四一〇〇四六

大田区東六郷三一十一十八

六郷神社社務所内

電話 〇三―三七三二―二八八九

振替 〇〇一九〇一六一―二三五五三

編集 平野卓治